猿新聞

編集・発行
山村　準
tel:0595-63-1725
Email
jyun.y@asint.jp

朱鷺の絶滅に想う

朱鷺（とき）は、日本のどこにでもいた鳥だったのです。

渡りをしないで、一年中日本に住み、日本人にはとても馴染み深い鳥だったのです。

現在、絶滅といえば朱鷺というほど種の保全のシンボルになっています。

何が、朱鷺をここまで追い込んだのでしょうか。

新潟県の鳥追い歌「一番一番憎い鳥は／ドウとサンギと小スズメと／しばを抜いて追ってった／佐渡ガ島まで追ってった」（ドウは朱鷺のこと）。

（毎日新聞4・25余録より）

朱鷺は、田を荒らす害鳥と信じられ捕獲されてきました。また、美しい羽を狙っての明治～大正にかけての乱獲もその一つの源因ですが、これだけでは絶滅までは行かなかったと思います。

朱鷺の餌は、水田に住むカエルやドジョウなどですが、近代化の流れで、水田や里山が開発・縮小されていったこと、戦後普及した農薬や化学肥料の使用量が増えてたこと、また、圃場整備による水路のコンクリート化などで、朱鷺のエサとなる生き物がいなくなってしまったことが大きな要因です。

農薬が原因で、朱鷺が不妊化したのではないかとも言われています。

これら全てが、周りの環境に手を加えて、自分に都合のよいように変えた人間の身勝手から起きています。

中国でも、野生のトキは日本のトキと似たような状態に追い込まれたことがありましたが、日本の例を他山の石として保護活動に成功しています。

朱鷺の棲めない環境は、私達人間にも深刻な影響を与えることは間違いありません。

今後は、農薬や化学肥料の使用量の規制や、より安全な農薬の開発が望まれるところです。

野鳥の減少

去年はあんなに来ていたツバメを、今年はあまり見かけません。

例年なら、ツバメなんてどの田んぼの上にも飛んでいたのですが。

ツバメは、古くから日本の自然の中に渡って来て、人との共存を象徴する野鳥です。

ツバメが姿を消すと、初夏の風物詩も消えてしまいます。

スズメも見かけるのが少なくなっています。

以前は「チュンチュン」という鳴き声で目をさましたものですが、最近耳にすることが少なくなったような気がします。

そのほかの野鳥も減少傾向にあるそうです。

何か怖いことが、起こり始めているような気がしてなりません。

原発事故の影響でしょうか？。チェルノブイリの事故で、鳥が半分くらいに減ったも言われています。

野鳥が減少するという環境は人間にとっても大きな問題です。

これは野生鳥獣全てに言えることですが、一旦、絶滅した種の再生には、とてつもない歳月と、人手とお金がいることを、朱鷺再生に学ぶべきです。

棲み分け

なぜ、野生動物が人里に来るのか？。

意識せず取り残した果実や、野菜などが野生動物を引き寄せていることを先ず、私たちは反省しなければなりません。

人間と野生動物がお互いが困らないようにして生きていくには、野生動物をむやみに増やさない（個体調整）ことも一つの方法です。

だが、これには朱鷺の二の舞を踏むことのないよう十分気をつけなければなりません。

農村の近代化による燃料革命で、山林の利用が減少し、山で働く人間が少なくなったことで、野生動物が里に下りやすくなっていることや、林業の衰退で山が荒廃し、本来の棲家である山の中に餌が足りなくなっていることなど、野生動物の棲む環境も大きく悪くなっています。

今後は、里山の再生と野生動物の生息地となる広葉樹林の整備（育成林整備）を早急に実施し野生動物を、本来の棲家にもどす「棲み分け」を図っていくことが、究極の獣害対策です。

「棲み分け」に向けては、現在被害を受けている農家の人たちだけではなく、町に住んでいる人たちも協力して取り組んでいくことが重要です。

ハナレザル対策

サルは基本的には群れで行動していますが、市内での情報ではハナレザルや、群れから一時的に離れたサルの被害事例が目立つています。

ハナレザルは、群れを離れて独り立ちしたばかりの若いオスです。

独り立ちすると群れを離れることはニホンザルの習性で、近親交配の回避のためだといわれています。

通常、秋になると交尾期に入り群れに入り込むことから、ハナレザルはいつの間にかいなくなります。

近年全国的に、目的もなく群れから一時的に離れ単独行動をするサルが増えているそうです。

こうしたサルを「ニート猿」と呼ばれているそうです。

ハナレザルは人慣れをしていて、その環境がよければ、人の生活圏から去らなくなってしまう可能性があります。

ハナレザルは神出鬼没で、どんなところにでも出没しゲリラ的な被害を出しています。

ハナレザルは発信器を装着していませんので、目視意外に情報を得ることができず、その対策は非常に困難です。

今後、被害が拡大するようなことがあれば、捕獲を検討しなければなりませんが、群れのサルは檻で捕獲できる事もありますが、広い範囲を動き回るハナレザルはよほど運が良いか、餌の少ない季節でもないと檻に入りません。

サルを捕獲する場合、「群れザル」と「ハナレザル」を十分に把握し、捕獲することが重要です。

「群れザル」をむやみに捕獲すると、群分かれを起こし被害の拡大につながる恐れがあります。

ハナレザルを捕獲するには、被害をだしている個体を特定し捕獲することが重要です。

大きな人身被害の情報は今のところありませんが、家屋への侵入などの被害は、ハナレザルであることが殆どです。

ハナレザルは、人慣れが進み人に威嚇してくることもあります。

遭遇した折りは、一人の時は絶対に追い払いなどしないで下さい。無視してサルを興奮させないように、静かにその場から立ち去って下さい。

特に、女性や子供には攻撃してくることもありますので、十分な注意が必要です。

サルの被害対策は難しいと云われていますが、正にその通りで、特にハナレザルは……。

サル対策の原点に戻って、ハナレザルが来ないような環境作りを、各地域毎に考えなければなりません。

大きな危険を冒してまで、人目に触れる場所にサルがやってくるのは、サルにとって利益があるからだと思います。

そのサルにとっての利益を、地域から無くすことが先決です。

基本的には、被害対策をせずに被害をなくすことはできないと思って下さい。

農作物がありサルがいるかぎり、被害が起こる可能性は残りますが、それを最小限に押さえるには、先ず、サルの嫌がる環境を造ることです。

サルは自分たちの嫌なことの多い里には出てきません。

これは、MDによる追い払いで矢川周辺にはサルが約一年近く出没していないと云うことで立証されています。

そのほかでも、サルに嫌がる環境を作ることは十分可能だと思います。

MDの協力で追い払いの強化などが考えられます。

MDCでは、複数犬での追い払いなどを検討しています。今後の活躍が期待されるところです。

次に、餌場を無くすということも重要です。

「獲られても怒らない」餌を無くすことです。

例えば、

・収穫後の放置作物や稲刈り後の落ち穂
・墓地の供え物
・節分の豆
・ゴミ捨て場の生ゴミ
・放置されたタケノコ
・捨てられたホダ木から出たシイタケ

など、獲っても被害にあったとは思わないようなものでも、猿にとっては大事な食料です。

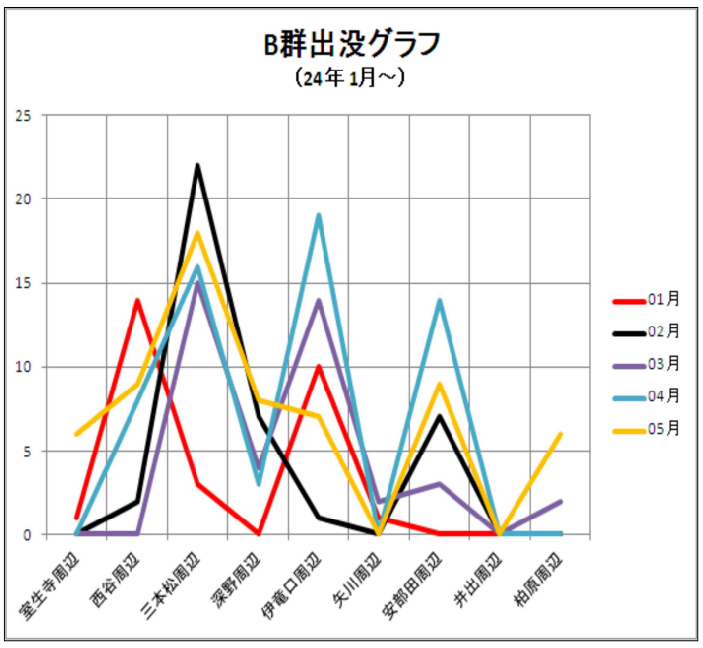
集落を点検し、サルの餌場を無くしましょう。

無防備での野菜作りは、餌ずけと同じだと思って下さい。

サルが侵入する時にチョット手間取る程度の柵でも大きな効果があります。

「猿落君」は手軽でいいと思います。

写真＝こんな程度の柵でも大きなが効果あります。



田植後 シカの食害

田植え後、水稲の活着期にシカの食害が毎年発生します。

出穂後はイノシシやサルによる食害が激しくなります。

シカは、一度食害した水田を反復して食害を起す習性があります。

葉の先端を一回ぐらい食害されても被害は軽微で減収に至りませんが、二回以上食害を受けると大きな減収に繋がります。

麦に対するシカ食害被害が増大しています。

厳冬期、麦圃場以外に緑草帯がない状況では、極めて大きな被害が発生しています。

シカ生息地では、無防備での麦の作付けは、シカの餌づけを助長し、作付け自体が餌づけとなります。

シカの被害から守るためには、シカの生態、習性に基づいた方法を講じることが基本です。

江戸時代に盛んに造られたシカやイノシシの侵入を防ぐための「猪鹿垣」の跡は今も各地で見ることができます。

また、徳川綱吉時代「脅し鉄砲」や獣害駆除に使用するための大量の火縄銃が貸し出されていたといいます。

これが、ネット柵・電気柵、ロケット花火に姿を変え、現代に受け継がれています

対策には、防護策を設置するのが最も手っ取り早く、効果的でしょう。

高さは、シカは肩高の2倍以上跳躍しますので、2メートル以上必要です。

シカ柵は高さに拘りますが、網と地面の隙間を無くすことが高さより重要です。僅か10センチの隙間からでも押し広げて侵入します。

忌避剤なども一時的な効果があり、取り入れ前の一時的な防除に適しています。